

# Lafcadio Hearn の “The Dream of a Summer Day” —捨てし者，捨てられし者

渡 部 知 美

Lafcadio Hearn の短篇 “The Dream of a Summer Day” は、来日第二作目の短篇集 *Out of the East* (1895) の巻頭に収められている。旅館の女将の鈴を鳴らすような声の奏でた “Urashima” という音による浦島伝説への誘い、Hearn による浦島伝説の再話、そして浦島伝説を巡る彼の物思いという三部から、主に本短篇は構成されている。本論においては、Hearn による語り直しの特徴、疑問を呈する語り手としての Hearn について考察する。

## I

Hearn の語る浦島伝説は、動物報恩、異郷訪問、神婚伝説、禁忌の破棄という四つの大きな要素を含んでいる。

動物報恩という要素は、室町時代から江戸時代初期にかけてつくられた『御伽草子』の「浦島太郎」において初めて現れている。Hearn が妻節子から聞いたであろうと言われているのは、明治 29 年巖谷小波作の「浦島太郎」であると思われる。Hearn による再話は、この両者から動物報恩譚の要素を受け継いでいる。<sup>1</sup>

ただ、Hearn による再話では、もう少し詳しく語られている。浦島は釣り上げた亀は「竜王様のお使いで」(“sacred to the Dragon God of the Sea”[6]), “the period of its natural life is a thousand—some say ten thousand—years. So that to kill it is very wrong” (6) と思い、丁寧に糸から外し神々 “gods” への祈りの言葉とともに亀を放している。漁師である浦島にとって、海を治める神である竜王が畏れ多い存在であることが分かる。その使いで長寿故に “a god” とも思える亀を殺すことは、憚られるのである。漁の出来、不出来、そして漁師の日々の暮らしに作用する海上の天候や海の状態を統治する竜神に対する浦島の畏怖の念が強調されている。

しかし、Hearn は『日本書紀』(720) や、奈良時代末期に成立したと言われている『萬葉集』といった古代の記録や歌集にある浦島伝説の持つエロスの要

素をも取り入れている。牧野陽子氏は、Hearn は、後者に収められている「水江の浦島子を詠む一首」を Basil Hall Chamberlain が英訳して *The Classical Poetry of the Japanese* (1880) の巻頭に収めた “The Fisher Boy Urashima” に感応して執筆したと指摘している。<sup>2</sup>

「まどろんでいる海の夢の中から」、深紅と青の衣を纏い、黒髪を足許まで垂らした 1400 年前のお姫様の格好で美しい乙女が立ち現れ、海上を滑るようにやって来て、舟の中で眠っている浦島をそっと揺り起こして言う。

“My father, the Dragon King of the Sea, sent me to you, because of your kind heart. For to-day you set free a tortoise. And now we will go to my father’s palace in the island where summer never dies; I will be your flower-wife if you wish; and we shall live there happily forever.” (6-7)

どんな人間にも及ばぬ美しさに心を奪われ、愛の芽生えを抑えることができなかつたと語られている。竜王の娘ならやはり竜であることなど思い至らなかつたかのである。娘の美しさと彼女がささやく甘い言葉は、浦島の心を忽ち溶かしてしまうのである。彼女と永遠に幸せに暮らせるという常夏の島は、南の楽園、不老不死の理想郷を想起させる。<sup>3</sup> 仙北谷晃一氏は、「水の江の浦島の子」という名は、「ありとあらゆる浦々、島々を知悉している練達の漁師」である（仙北谷 257）と指摘し、更に次のように述べている。

彼は、みずからの生きる場である海に対して、おそらくは自覚せざる愛情と感謝と畏怖とを同時にいただいていた。彼が海神に嘉せられる資格は、十分であった。

この海との一体感、日本民族を、そのもっとも深いところで養い支えてきたものだったろう。・・・

浦島の像そのものに色濃く投影されている海への信仰は、農耕生活の時代にはいっても揺らぐことはなかつた。海神は水を司る神でもあったからである。神の側からいえば、すぐれて有能かつ敬虔な漁師を憎からず思う心、人間の側からすれば、文字通り生殺与奪の権を握られている海神の意を迎えたいという気持—こういうものが双方から引き合うかたちで、浦島を龍宮城へ赴かせたものと思われる。浦島は選ばれた人間であったが、同時に海の民の悲願と熱望の結晶でもあった。（仙北谷 258）

浦島と姫は、まるで手に手を取るように、櫂を一本ずつ持って二人で協力して舟を漕いで一路南へと向かう。心が蕩け忽ち心を掬われたもとは、海神に自

分は選ばれたのだという思いが浦島にはあったからだと考えられる。<sup>4</sup>

## II

Hearn は西洋の読者を対象として浦島伝説を語っている。“Once you hear the story, you will never be able to forget it.”(5) とか “just as you may still see, off the far western coast, wife and husband rowing together . . .”(7) と、時折読者に呼びかけながら語っている。国際舞台に登場したての日本という西洋の一般読者にはほとんど知られていない国の、それも 1416 年も昔の物語を理解して欲しいという語り手としての Hearn の気持ちが感じられる。

浦島が竜神の娘に誘われて辿り着くのは、海上に浮かぶ常夏の島 “the island where summer never dies”(7) である。この表現はリフレインのように何度か繰り返される。そのたびに、海と空が一つに溶け合っ水色の境界にぽっかり浮かぶ常緑の島、時間がゆったりと流れ、まるで真夏の真昼に時間が永遠に停止したかのような静けさ、穏やかさが想像される。Hearn がこの物語を春ではなく夏に設定しているのがここで活きている。<sup>5</sup>

この島で浦島を “the Dragon King” の義理の息子として迎え、礼装をして二人の結婚を祝福するのは、“creatures of the Sea”(7)、“servants of the Ocean God”(8) と表現された海の生き物達である。キリスト教への信仰を捨てた Hearn であるが、<sup>6</sup> “creatures” という表現に聖書における神による万物創造の響きを感じられる。これは、西洋読者への配慮と考えられる。また、海の生き物とはいえ小さな神々とも捉えられるから、Hearn は「キリスト教以前の心性」(平川『ラフカディオ・ハーン』146)、ギリシャ神話の世界をイメージしていたとも考えられる。海の生き物達に歓迎され、日々、“new wonders and new pleasures”(8) の中で浦島は過ごす。「魅惑の島の娯楽の数々」(“pleasures of that enchanted land”[8]) が、浦島に人間界の現実への思いにひたる暇も与えなかったのだと思われる。また、神仙婚とはいえ異類婚でもあり、人間と動物との間に明確な境界線を引かない感覚、人間もまた動物の一種類であるという捉え方が日本の昔話のような世界を生み出している。昔の日本人が抱いていた「自然の中のものそれぞれが、動物もふくめて、独自に意味と力をもっているという自然観」(小沢 179) を Hearn は捉えている。彼が幼年時代を過ごしたアイルランドのケルト族の「民間信仰のなかにはいろいろな自然神があった」(小沢 177)。しかし、「キリスト教の伝播と共に追放されてしまった。一神教であるキリスト

教にとっては、それら自然のあちこちにいる神は邪神であり、魔的なものとされてしまった」(小沢 177-178)。従って、Hearn は日本人の、人と自然との強い結びつきを示す神々への信仰を理解する感性を素地として持っていたのである。神婚ではあるが、浦島と竜神の娘との夫婦の情愛の深さは、『萬葉集』と『御伽草子』の両方から受け継いでいる。しかし、いくら日々楽しくとも、それに完全に身を任せられないのが人間の性ではないか。両親のこと、故郷のことが思い起こされ、一時でも帰りたいという思いが大きくなっていく。まずここに、単なる昔話ではなく、現実味があるという意味で、浦島が海神の島から持ち帰ったという漆塗りの箱と釣竿、宝石が保管されている神奈川の寺や、1416年前等、具体的、歴史的記述の積み重ねによって、浦島の物語を伝説に Hearn が仕立てている意味がある。

絹紐で結ばれた小さな箱を持って “It will help you to come back to me if you will do what I tell you. Do not open it. Above all things, do not open it — no matter what may happen! . . .” (8) と言って渡す時、姫は万感の思いを込めている。渡された箱の紐を決して緩めないと約束しながらも、“the summer light over the ever-sleeping sea” (9) の中を通して島を後にする浦島の心は、飛ぶように故郷に向かっていてのではないか。浦島が目にする “the blue mountains of Japan, sharpening in the white glow of the northern horizon” (9) という表現は北と南、現実世界と南の楽園という対比を想起させる。これは牧野氏や西氏も指摘するように、Hearn 出身の西洋と彼が今身を置く後進国日本をも意味すると捉えられる。

小川のせせらぎの音、山の形は同じでも他のものは見慣れぬものばかりであり、“the place was at once the same, and yet not the same” (9) という表現に、浦島の当惑が感じられる。両親の住む家を探しても見つからず、“a great bewilderment—a weird doubt” (9) が心に生じている。長寿故の知の象徴のような老人の言葉で、自分は 400 年前に死んでいることになっていると知り、老人が示した墓地で自身の墓、父母や一族、知己の人々の墓を目にした時に彼の疑念はさらに深まるのだと思われる。死んだものと思われ墓が建てられたと推測できたろうが、島で過ごした 3 年が 400 年にもあたるとは理解できず、彼は謎と悲しみの中に突き落とされる。従って、自分は何か「不思議な幻想の犠牲」 (“the victim of some strange illusion” [10]) になっているのだと思ったり、現実世界と楽園との境界線である浜辺へ戻る。彼の中で “But what was this

illusion? And what could be in that box? Or might not that which was in the box can be the cause of the illusion?”[10]) という思いが募り、彼の疑念は姫からもらった箱に向けられる。その中に何かが入っていてそれが幻想の元になっているのではという思いが、彼女への忠誠に一瞬打ち勝ち、浦島は幻想を晴らしたくて、真実を知りたくて箱を開けてしまう。“Doubt mastered faith”(10)と表現された疑念が信義に打ち勝った瞬間は、禁じられたことと知りつつ過ちを犯す人間誰しもが持っている心の弱さを露呈している。<sup>7</sup> 今の状況があるがままに受け入れ、頼れるのは竜神の世界の者達だからと諦めて、島に帰ろうと思ひさえしていない。謎を解かないではいられない点に、両親や自身が慣れ親しんできた世界への思いを断ち切るこのできない、その思いを封じ込めてしまうこのできない浦島の抱える人間としての苦悩が感じられる。

箱から吹き出た白い煙によって、浦島が若者から老人へ、更に死へと至る様を Hearn は劇的に表現している。「氷のような冷氣」(“icy chill”[11])が血管を走り、歯が抜け顔は皺が寄り、頭髮は雪のように白くなり、手足はしなび力は潮が引くように体から抜けていく。牧野氏は、「“chill”(寒気)が、魔力を持った生き物のように浦島の肉体をひとなでして生を奪っていく」(牧野 271)と表現している。砂浜に生気を失って倒れ、浦島は“crushed by the weight of four hundred winters”(11)と表現されている。時間の流れが急に速まったかのように、刻々と変化する様が捉えられている。“icy chill”や“winters”という表現は、北の現実世界と南の楽園は、それぞれ互いに異なる時間軸を持った世界であることを暗示している。箱の中に閉じ込められていたのは、浦島の命、後者での3年に相当する前者での400年以上の歳月と捉えられる。この箱は巖谷小波版では龍宮の土産で「玉手箱」であるが、「玉」は「魂」と語源的に同根であり、「浦島の旅路を見守り扶ける力が、その箱にこめられていた」という解釈もある(仙北谷 261)。即ち、姫の浦島への思いがその箱には込められていたと捉えることもできる。龍宮城での3年が700年に相当するという違いはあるが、前者の解釈は、「浦島が年を、亀がはからひとして、箱の中にたたみ入れにけり。さてこそ、七百年の齢を保ちける」(423)と表現された『御伽草子』版とも共通する。だが、ここでは亀は姫でもあり、姫による配慮という意味合いも含まれている。また、白煙が立ち昇りあとには何も無いのを見た浦島が、自分の幸福を自らこわし愛する妻の元へ帰れぬことを悟り、「身も世もあらず泣き叫ぶ」(“he wept and cried out bitterly in his despair”[11])と、浦島の心の乱

れ、絶望感を Hearn は捉えて表現している。この点は、「立ち走り 叫び袖振り 臥いまるび 足ずりしつつ たちまちに 心消失せぬ」(巻九 1740) と外的様子から浦島の精神的衝撃を照射した『萬葉集』の高橋虫麻呂による長歌と似ている。

しかし、Hearn の再話独自の点は、箱から吹き出す白煙が浦島に与えた影響よりも、むしろそれが島にいる姫に与えた影響にある。

Instantly, without any sound, there burst from it a white cold spectral vapor that rose in air like a summer cloud, and began to drift away swiftly into the south, over the silent sea. There was nothing else in the box. (11)

『御伽草子』版には、「紫の雲三すぢ上りけり」(423) とあるが、島へ煙が向かうという記述はない。一方、『萬葉集』にはあり、森亮氏は Hearn の再話と比較して次のように述べている。

私は玉手箱の煙は自然現象の常として上昇していつのまにか消えてしまうものと決め込んでいた。そこで万葉集の長歌を読み返してみると驚いたことに「白雲の箱よりいでて常世辺に棚引きぬれば」とある。仙境から箱詰めにして運ばれて来た「白雲」が仙境に帰って行くのである。それにしても「棚引きぬれば」からはハーンの叙述のような軽快な飛行の印象は与えられない。(『小泉八雲の文学』145)

“drift away swiftly” という表現は、白煙が合図となってずっと姫へ、浦島の裏切りという悲しい知らせをもたらしたことを暗示している。Hearn は、姫が言葉もなく悲嘆に暮れるのが想像できるのである。

I saw the Daughter of the Dragon King waiting vainly in the palace made beautiful for his welcome—and the pitiless return of the Cloud, announcing what had happened—and the loving uncouth sea-creatures, in their garments of great ceremony, trying to comfort her. (16)

待ち侘びている姫のもとへ、冷酷にも雲が帰って来る。夫は永遠に帰らぬということだけでなく、自分との約束を破ったということで、打ち拉がれる思いであると感じられる。海の生き物達が礼装に身を包んで姫を慰めようとしているというのは、Hearn の想像力が紡ぎ出した光景である。不格好でも、人の情の分かる心優しき生き物達である。浦島と姫が鶴と亀になるという『御伽草子』版の結末に焦点化されている夫婦の情愛の細やかさを、Hearn は理解し得ていると考えられる。しかし、彼はそれ以上に、裏切られ言わば捨てられた姫に焦

点を当てているのである。

Hearn の耽る物思いがその理由を明かしてくれる。

I have a memory of a place and a magical time in which the Sun and the Moon were larger and brighter than now. Whether it was of this life or of some life before I cannot tell. But I know the sky was very much more blue, and nearer to the world . . . (17-18)

彼の心は、幼い時に過ごしたギリシャのイオニア海に浮かぶレフカダ島へと記憶の糸を辿っている。

And all that country and time were softly ruled by One who thought only of ways to make me happy. . . . At last there came a parting day; and she wept, and told me of a charm she had given that I must never, never lose, because it would keep me young, and give me power to return. But I never returned. And the years went; and one day I knew that I had lost the charm, and had become ridiculously old. (18-19)

「その国と時間をやさしく統べる人がいて、その人はひたすら私の幸福だけを願っていた」というのは、明らかに Hearn の母 Rosa と捉えられる。夫のイギリス軍軍医である Charles Hearn から一方的に離婚をされ、幼い Hearn が生き別れになった母である。父の心変わり故に、母は捨てられたのである。しかし、Hearn は、母を独り占めできた時の心地良さ、母の優しさ、愛に包まれて子守唄のように聞いた話の面白さ、話をしてくれるのを待っている時のワクワクした気持ちを、今も覚えている。心身ともに母子一体の関係にあったのである。戦争花嫁であった母は、生い育った文化的環境の違いから、ダブリンの夫の家で孤立し、幼い Hearn が唯一の生きるよすがであった。その母の自分への濃密な愛に抱かれて、二人だけの世界が確かに存在していたことを体で記憶しているのである。従って、父に代表される男性中心の西洋キリスト教文明社会とは異質の世界として、故郷ギリシャを思慕し、母を思慕する気持ちを Hearn は抱き続けてきたのである。浦島の話が春に始まるのを知りながら夏に設定したのも、記憶のきざしを降りていくと青色の世界に浮かぶ「ある魔法がかけられた国」、幸福感で満たされていたレフカダ島に辿り着くからである。夫に捨てられ哀しい運命を辿った母への哀惜の念故に、母と娘が、父と浦島が重なって見えるのである。Hearn の思いが捨てられた娘の方へ向かうのも不思議ではない。

ここで、永遠の若さと「帰る力」とがセットになっていることに注意したい。お守りをなくしてしまい、母との暗黙の約束を破ったことで、自分は「愚かしい齢を重ね」、永遠に空しく母の面影を追い続ける存在になってしまったと Hearn は思っているのである。従って、彼は浦島と自身との類似性を悟っているのである。

### III

稲賀繁美氏は、Hearn の *Kwaidan* (1904) の世界について、「父に捨てられコルフ島に狂死した母の面影こそ、『怪談』を通じて紡ぎだされた怨霊の正体」であるという遠田勝氏の言葉を引いて、「作者 Hearn の意識の底に蠢く母の無念への憤怒は反社会的な攻撃性の牙すら剥く」(稲賀 154) と述べている。そして、Hearn について、「しかし復讐の道德観には疑問を呈する外国人という別人格を、周到にも舞台のワキに確保したのではなかったか」(稲賀 154) と指摘している。この「外国人という別人格」は、本作品の Hearn の物思いの部分にも表れている。「当惑のなかで神々の意図を疑い」(“in his bewilderment doubted the purpose of the gods” [16]) 箱を開けてしまった浦島は、何の苦もなく息絶えただけでなく、その浦島を、日本人は神社まで建てて浦島明神として祀ったことに Hearn は疑問を呈している。

Things are quite differently managed in the West. After disobeying Western gods, we have still to remain alive and to learn the height and the breadth and the depth of superlative sorrow. We are not allowed to die quite comfortably just at the best possible time: much less are we suffered to become after death small gods in our own right. How can we pity the folly of Urashima after he had lived so long alone with visible gods? (17)

西洋なら、生きて悲しみのどん底で後悔や絶望、苦しみに苛まれることが神々に背いたことへの罰であり、Urashima の愚行に対する日本人の気持ちは理解できないという西洋人としての考えを述べている。ここには、自分の父親の母親に対する仕打ちを許せないという Hearn の気持ちが、まず反映されていると考えられる。

Hearn の思いは深まっていく。

Perhaps the fact that we do may answer the riddle. This pity must self-pity; wherefore the legend may be the legend of a myriad souls. The thought of it

comes just at a particular time of blue light and soft wind—and always like an old reproach. It has too intimate relation to a season and the feeling of a season not to be also related to something real in one’s life, or in the lives of one’s ancestors. (17)

上記引用文一行目の“do”は“pity”という語に置き換えられる。水平線の辺りで水色に溶け合った大きな宇宙空間が広がり、夏の真昼に永遠に時が止まったかのように見えるが故に、古代から連綿と続いて来たゆったりとした時間の流れを感じさせる。その時間的眺望が、Urashimaの愚かしさは、自分も含めて人なら誰でも持っていることを Hearn に悟らせている。同じ視線の高さで捉えて、人々は Urashima を哀れに思うことができたのだと推察し得ている。故に、自己憐憫の気持ちが働いたのだということにまで Hearn は思い至っている。日本人が神々に対して抱く心的距離感の近さ、人は死後神になるという日本人の思いを、感得している。禁忌を破るという愚行を犯し、知らぬ間に年を重ねて帰れぬ身となったのであり、自身も浦島であるという思いに向き合わざるを得ないのである。ギリシャ/アイルランド、日本/西洋という、異なる時間軸を持った異なる二つの世界に身を置いた経験から、自分が嫌った父親と自分が重なるという矛盾故の、自己分裂を Hearn は抱えているのである。

Hearn は節子から聞いた出雲の伝説を、*Glimpses of Unfamiliar Japan* (1894) に収められた“By the Japanese Sea”において再話している。貧しさ故に六人の子供を捨てて来た百姓の父親に、口も利けない筈の赤ん坊が発する、「御父つあん、わしを仕舞いに捨てさした時も、丁度今夜の様な月夜だたね」(“Why, father! the LAST time you threw me away the night was just like this, and the moon looked just the same, did it not?” [VI 208]) という言葉に、平川祐弘氏は Hearn の自分を捨てた父親に対する「復讐したい欲求、その意識下の衝動」の反響を読み取っている(『西洋脱出の夢』134)。Hearn の心の生傷のような痛みが感じられる。稲賀氏は、彼の心の裂け目に関し、更に次のように指摘している。

「前妻の子」として前半生に苦難を舐めたハーンにとって、禁じられた嗜虐への陶醉と自己懲罰とが渦巻く絵巻こそ『怪談』の世界であり、そこからの救済＝自己昇華を彼に許したのが、複式夢幻能のワキの位置に、異国の立会人として自らを召喚するという、日本体験だったとは言えまいか。

(稲賀 154–155)

夢幻能とは、超現実的存在の主人公(シテ)が旅人(ワキ)の前に出現し、土

地に纏わる伝説や身の上を語る形式の能である。捨てられし者として姫への Hearn の哀れみの情は感じられるが、「禁じられた嗜虐への自己陶醉と自己懲罰」という特徴は本作品には表れてはいない。しかし、異国の女性を娶り子をなしそこで暮らす生を選んだ自分を、常に醒めた目で見つめるもうひとりの自分を意識しないではいられない点に、Hearn の倫理性が感じられる。「異国の立会人」としての自らの召喚は、彼にとって、自己の魂の浄化と清廉な自己保持の手段であると考えられる。

農民にとっては、竜は水神でもある。村人達が雨乞いの太鼓の音を響かせる中、Hearn は Urashima と竜神の娘についての夢想から永遠に抜け出せないかのようなのである。「若返りの泉」の話は、二次元的世界への時間軸の導入という点で、浦島伝説と似ている。しかし、現実には時間軸を遡るということはありませんから、人の生を反映した伝説とは彼には感じられないのである。夢想に耽る Hearn の胸が、鳴り続ける太鼓の音に呼応して鼓動しているのが伝わってくる。現実を忘れて永遠の若さを謳歌した果てに、魂を吸い取られたかのように一気に古い息絶える浦島伝説は、人の生の真実を映したのものとして Hearn の胸に迫るのである。

## 注

本稿における Hearn の作品からの引用は、*The Writings of Lafcadio Hearn* (Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1922) (Reproduced by Rinsen Book Co., 1988) により、*Out of the East and Kokoro* (第 VII 卷) からの引用は、本文中で括弧内で頁数のみを示し、その他の作品については、巻数及び頁数は括弧に入れて示す。

- 1 Hearn は、浦島伝説を再話するにあたり、少なくとも『丹後国風土記』逸文の筒川の嶼子に関する部分と、『日本書記』(720) の水江浦島子に関する部分、『萬葉集』所収の高橋虫麻呂による歌「水江の浦島子を詠む一首 并せて短歌」、この長歌と短歌の William George Aston による英訳と Basil Hall Chamberlain による英訳の詩“The Fisher Boy Urashima”と、Chamberlain による子供向けの散文で縮緬本 Hasegawa’s Japanese Fairy Tale Series No.8 *The Fishier-Boy Urashima* (1886)、『御伽草子』は読んでみると推察される。

動物報恩譚は、世情が比較的安定し礼節を重んじる時代になって好まれるようになったと思われる。また、Hearnの気質にも合っていたと思われる。

- 2 牧野氏が指摘する Chamberlain による伝説を語る詩人の視線の強調，“chill”という語の挿入，太陽を入れた海の描写は，Hearn に刺激的影響を与えたと考えられる。
- 3 “Elysium”のもとの日本語は何かと Hearn に問われて，Chamberlain は「蓬莱」と答えたとき，牧野氏は述べている。(牧野 259)
- 4 水野祐氏によると浦島伝説の起源は、『丹後国風土記』における丹後国与謝郡筒川に纏わる日下部氏の始祖伝説としての浦嶋子伝説で，海女集団の中でそれは発生した。潜水漁法を専業としているということから，海女にとって海神の宮は海底にあった。気候変動による海女の温暖な地域への移住とともに，その伝説は各地に伝播し，船漁海人にとって海神の所在する所は海上の隔たった場所となった。
- 5 『萬葉集』の長歌は季節を春に設定しているが，Chamberlain 訳の縮緬本は夏に設定している。(牧野 271)
- 6 シンシナチ時代に Hearn は，Patrick という Christian name を捨てている。
- 7 牧野氏は，「浦島の疑念は，「信」(faith) の実態が「幻想」(illusion) ではないかと問う，ある意味で「近代の知」の色合いを帯びたものとして，提示されている」と指摘している。(牧野 289)

### Works Cited and Consulted

- Aston, William George. “The Legend of Urashima.” *A History of Japanese Literature*. Ed. Terence Barrow. Rutland and Tokyo: Charles E. Tuttle Company, 1972.
- Chamberlain, Basil Hall. “The Fisher Boy Urashima.” *Japanese Poetry. Collected Works of Basil Hall Chamberlain*. Vol.4. Bristol: Ganesha Publishing, 2000.
- Hearn, Lafcadio. “By the Japanese Sea.” *Glimpses of Unfamiliar Japan. The Writings of Lafcadio Hearn*. Vol. VI. Boston and New York: Houghton

Mifflin Company, 1922. (Reproduced by Rinsen Book Co., 1988).

Hearn, Lafcadio. “The Dream of a Summer Day.” *Out of the East and Kokoro. The Writings of Lafcadio Hearn*. Vol. VII.

稲賀繁美 「遠田勝著『〈転生〉する物語—小泉八雲「怪談」の世界』 『比較文學研究』第九十八号 東京：東大比較文學會，2013.

巖谷小波 『日本昔噺』東京：平凡社，2001.

植垣節也校注・訳『風土記』『日本古典文学全集』第5巻 東京：小学館，1997.

梅本順子 『浦島コンプレックス—ラフカディオ・ハーンの交友と文学』  
東京：南雲堂，2000.

大島建彦校注・訳 『御伽草子集』『日本古典文学全集』第36巻 東京：小学館，1974.

小沢俊夫 『世界の民話—ひとと動物との婚姻譚』 東京：中央公論社，1979.

小沢俊夫・稲田浩二編 『日本昔話通観』第18巻 京都：同朋舎，1978.

大貫 徹 「〈帰還しない旅〉の行方—「夏の日」の夢」を読みながら 『比較文學研究』第八十五号 東京：東大比較文學會，2005.

小泉節子 「思い出の記」 『日本の面影』II ラフカディオ・ハーン，池田雅之訳 東京：角川，2015.

小泉時・小泉凡編 『文学アルバム 小泉八雲』 東京：恒文社，2000.

小泉八雲 『明治日本の面影』平川祐弘編 東京：講談社，1990.

小泉八雲 『日本の心』平川祐弘編 東京：講談社，1990.

小泉八雲 『東の国から・心』平井呈一訳 東京：恒文社，1995.

小島憲之他校注・訳『日本書紀』②『日本古典文学全集』第3巻 東京：小学館，1996.

小島憲之他校注・訳『萬葉集』②『日本古典文学全集』第7巻 東京：小学館，1995.

関 敬吾 『日本昔話大成』第2巻 東京：角川書店，1978.

関 敬吾 『日本昔話大成』第7巻 東京：角川書店，1979.

関田かおる 「ハーンの父母像とその変容」『ユリイカ』第27巻4号 東京：青土社，1995.

仙北谷晃一 『人生の教師ラフカディオ・ハーン』東京：恒文社，1996.

西 成彦 『耳の悦楽—ラフカディオ・ハーンと女たち』東京：紀伊國屋書店，2004.

- 平川祐弘 「ハーンとクローデルが見た「神の国」」 『比較文學研究』 第八十五号 東京：東大比較文學會，2005.
- 平川祐弘 『小泉八雲とカミガミの世界』 東京：文藝春秋，1988.
- 平川祐弘 『小泉八雲 西洋脱出の夢』 東京：講談社，1994.
- 平川祐弘 『ラフカディオ・ハーン—植民地化・キリスト教化・文明開化』 京都：ミネルヴァ書房，2004.
- 牧野陽子 『〈時〉をつなく言葉—ラフカディオ・ハーンの再話文学』 東京：新曜社，2011.
- 水野 祐 『古代社会と浦島伝説』 上・下 東京：雄山閣，1975.
- 森 亮 『小泉八雲の文学』 東京：恒文社，1980.
- 森 亮 「ラフカディオ・ハーンの再話文学」 『現代のエスプリ』 第91号 東京：至文堂，1975年2月.
- 『隠岐・島後民話集』 松江：島根大学昔話研究会，1984.
- 『隠岐島・布施村の民話と民謡』 松江：島根民話研究会，1978.